

朝日遺跡縄文時代貯蔵穴出土の植物遺体

渡 辺 誠*

(1) はじめに

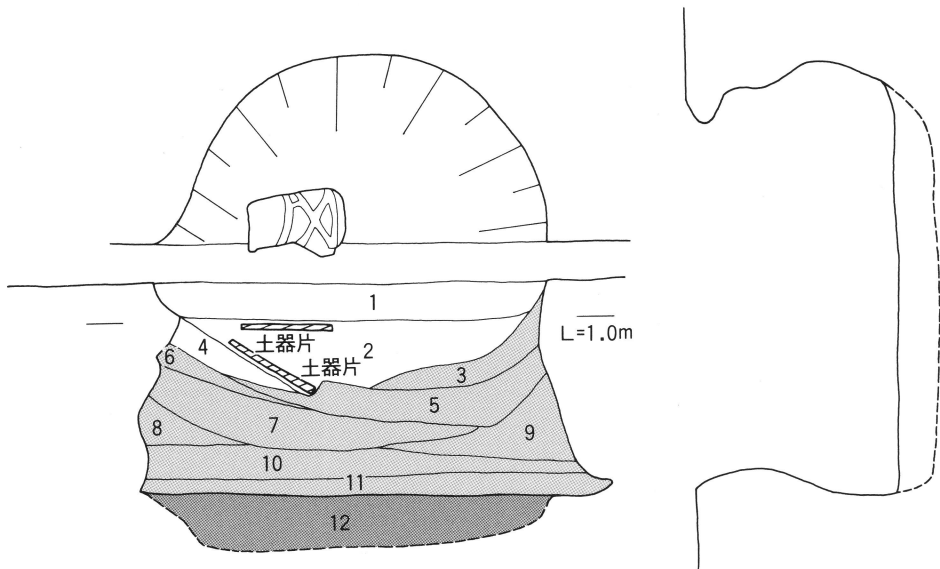
愛知県埋蔵文化財センターより調査の機会を与えられた、同県西春日井郡清洲町所在朝日遺跡の縄文時代貯蔵穴出土植物遺体は、すでに採取されていた資料を名古屋大学考古学研究室へ搬入の上水洗選別作業を行い、検討を加えたものである。

(2) 出土状態

1988年8月に朝日遺跡の63A'区において、旧河道の斜面に縄文時代の貯蔵穴2基が発掘された。現海水準の1m未満の低位にあることが重要である。

2基のうち1基(SK01)には植物遺体はみられなかったが、他の1基(SK02)にはドングリ類が検出された。このSK02は径1~1.2m、深さ5.5mの円形で、資料はその北半部分より採取されている(第1図)。

青灰色シルト層に掘り込まれたこの貯蔵穴内の層序は、次のとおりである。



第1図 貯蔵穴(SK02)実測図

* 名古屋大学文学部助教授

第1・2層：黒色粘質シルト（土器廃棄塋堀埋土）

第3・4層：青灰色粘質シルトブロック混じり黒色粘質シルト（崩土または埋立土掘り残しか？）

第5層：暗灰色粘質シルト（ドングリ少）

第6層：暗灰色粘質シルト、やや砂（ドングリ少）

第7層：暗灰色微砂土（ドングリ混）

第8・9層：3と同じ、崩土（ドングリ混）

第10層：灰色粘質シルト（ドングリ混）

第11層：青灰色粘質シルト、整地層か？（ドングリ混）

第12層：褐色砂の中に青灰色粘質シルト層が浸透して界面不明瞭（浸透層）

これらは、第1・2層、第3～11層、および第12層の3群に大別される。

このうち12層は地山であり、第1・2層は廃棄塋としての転用部分である。すなわち第3～11層が本来の貯蔵穴としての層序を示しているものであり、ドングリ類もこれらの層からのみ検出されている。

なお第1・2層より出土した土器は、底部のみを欠くバケツ形深鉢であり、縄文時代後期前葉に属する典型的な関東地方の掘之内Ⅱ式土器である。貯蔵穴の年代を明確に示すとともに、文化史的にもきわめて興味深い資料である。

（3）資料のリスト

搬入された資料は土のままであり、その量と層序との関係は第1表に示すとおりである。量は第10・11層が多く、第5・7層もやや多い。ドングリ類の検出量もほぼ同一傾向を示している。

水洗選別で検出された資料の内訳は、第2表に示すとおりである。大部分はドングリ類であるが、他に少量の微細種子などが含まれている。ただしこれらの微細種子は低地遺跡

資料番号	注記					備考
1	朝日遺跡	63A' VIA 17i	SK02	第 5 層	880825	コンテナ 2 箱
2	〃	〃	〃	第 6 層	〃	〃 1 箱
3	〃	〃	〃	第 7 層	〃	〃 2 箱
4	〃	〃	〃	第 8 層	〃	〃 1 箱
5	〃	〃	〃	第 9 層	〃	〃 1 箱
6	〃	〃	〃	第10層	〃	〃 3 箱
7	〃	〃	〃	第11層	〃	〃 4 箱

第1表 搬入資料一覧表

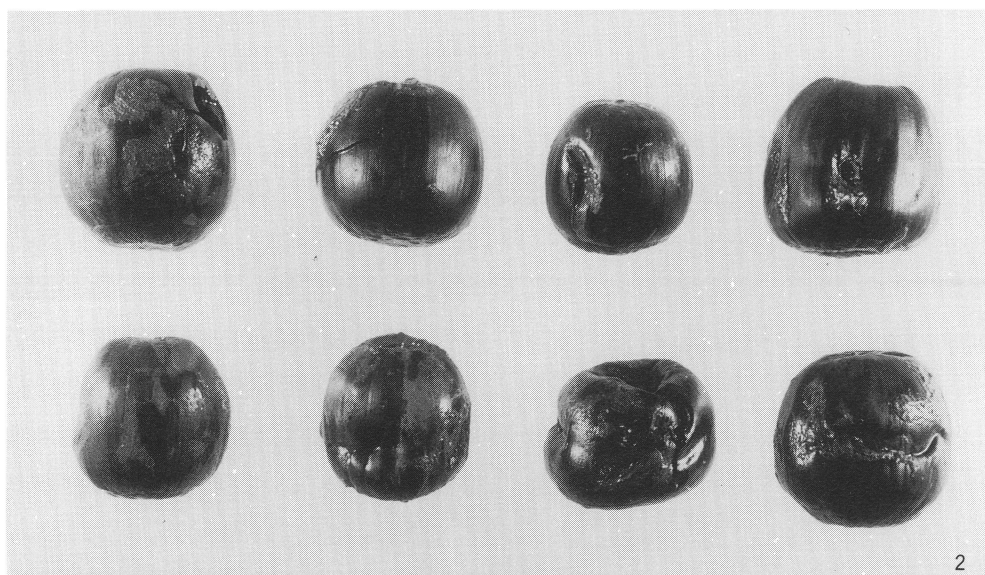
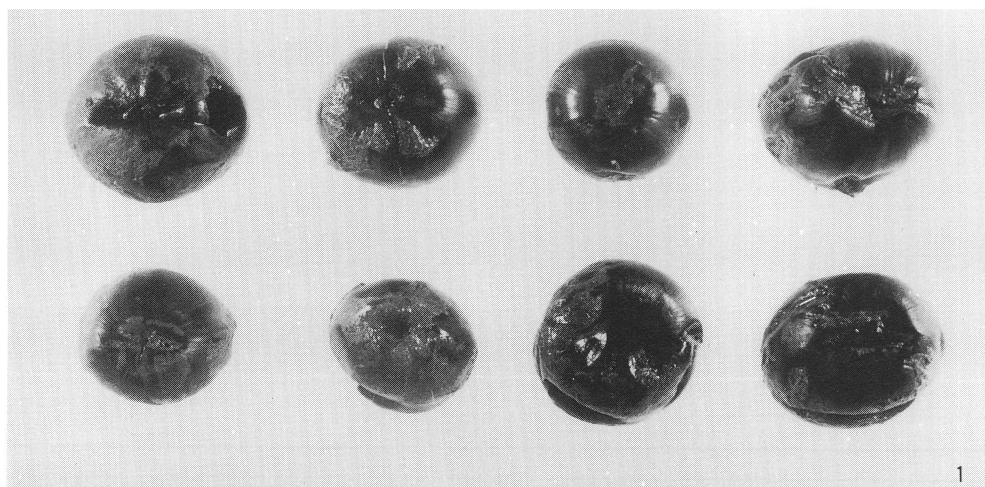


写真1 ドングリ類(実大) 1:上面観、2:側面観、3:へそ、4:子葉.

にあっては混入の危険性が高く、本遺跡でもしばしば冠水しているためその危険性が高く、検討対象に含めないことにした。また炭化材は細片のみで、土器も細片 1 片のみである。

(4) ドングリ類の検討

ドングリ類は子葉がほとんど残っていないため、若干の種皮が水づけ状態で辛うじて形状を保っているにすぎない。このため明確にサイズを測定することは不可能であるが、すべて球形で大型の種類のみであり、高さ・径とも2.0cm前後のものがもっとも多い(写真1—1・2)。このサイズは、ブナ科コナラ属コナラ亜属のクヌギ(*Quercus acutissima* CARR)、あるいはアベマキ(*Quercus variabilis* BLUME) などであると考えられる。

これらはほとんど実だけを採集していたとみられ、殻斗はまったく検出されていない。なお子葉(同4)と幼果も、ごく少量検出された。

これらの個体数の算定には、へその部分(同3)を用い、2分の1以上残っている場合についてのみ算定した。その結果は第3表に示すとおりである。総数322個体である。

しかしこれとは別に、久保和士氏等の努力によって多数検出された頂端の花被(写真2)によると2641個体となり、へそによる個体数の8倍以上となる。この差は低地における貯蔵穴の機能を理解するうえできわめて重要視されるので、項を改めて検討することとする。

(5) 低地貯蔵穴の機能

そもそも本遺跡例のような低湿地における貯蔵穴の機能はアク抜きにあるのではなく、乾燥させず短期貯蔵する点にある。堅果類を長期保存するためには、よく乾燥させた上で

資料番号	遺物名	ドングリ類				微細種子	炭化材	土器破片
		種皮	花被	子葉	幼果			
1		○	○			○	○	
2		○	○			○	○	
3		○	○			○	○	
4		○	○			○	○	
5		○	○			○	○	
6		○	○	○		○	○	○
7		○	○		○	○	○	

第2表 遺物一覧表

資料番号	部位	
	へそ	花被
1	7	86
2	5	19
3	22	86
4	47	38
5	14	71
6	177	865
7	50	1476
計	322	2641

第3表 ドングリ類数量表

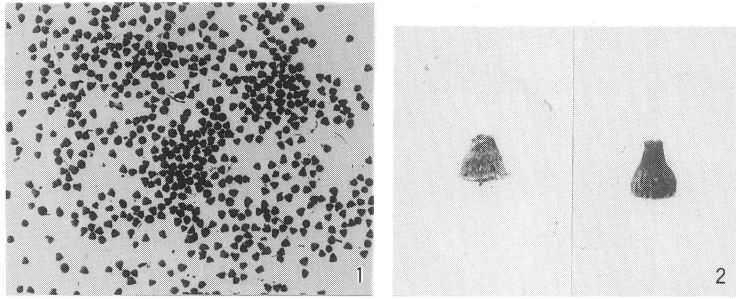


写真2 ドングリ類の花被 1：実大、2：10倍大

屋根裏などに貯蔵するのであるが、そのかわり皮むきやアク抜きの手間が倍加する。そのため秋に採集したものをその冬に食べる場合には、湿気のあるところに乾燥させずに生貯蔵するのである。その作業は毎冬繰り返されるのであり、本貯蔵穴例のようにへそと花被との間に8倍以上もの差があるということは、模式的に記せば、へそは最終時点での取り残し、花被は貯蔵された全量を示しているとみなし、使用回数を示していると理解することができる。

ドングリ類については、アク抜きの有無や方法の差異などを中心に、第4表のように4類に分類される。そして本遺跡例はアク抜きの必要なA類のみである。

ドングリ類のアクは水溶性のタンニンであるが、その質と量に差異があるらしく、A・B類とC類とでは若干アク抜きの方法に違いがある。その理由は食べ方にも関係があり、A・B類は粒のままの場合には丹念な煮沸と水さらしを何度も繰り返さなければアク抜きができない。しかし製粉さえすれば水さらしだけでもアク抜きができる。

これに対してC類の場合は、製粉の有無にかかわらず水さらしだけでもアク抜きができる、という違いがある。縄文時代前期以降の石皿などの製粉用具の発達は、これらのことと深い関係があるとみなされる。(渡辺1987)。

民 俗 分 類	属	種(出土例のみ)	森 林 帯
A. クヌギ類 製粉または加熱処理+水さらし	コナラ属	クヌギ	落葉広葉樹林帯 (東北日本) (韓国)
B. ナラ類 製粉または加熱処理+水さらし		カシワ	
		ミズナラ	
C. カシ類 水さらしのみ		コナラ	照葉樹林帯 (西南日本) (韓国南海岸)
D. シイ類など	アカガシ亜属	アカガシ	
		アラカシ	
	シイノキ属	イチイガシ	
	マテバシイ属	ツブラジイ・スダジイ マテバシイ	

第4表 ドングリ類の分類

本貯蔵穴例は縄文時代後期に属するのであるから、すでに製粉用具は十分に発達した段階である。したがってアク抜きにどの方法が使われたかという問題に関しては、今後の本遺跡における石皿・磨石などの製粉用具の研究に期待したい。

(6) 本貯蔵穴の意義

本遺跡例のような良好な状態で発掘された縄文時代の貯蔵穴は、東海地方においては晩期に属す東海市ト、メキ遺跡（渡辺1988）に次ぐものである。ドングリの種類もほぼ同じである。これによって縄文時代の生活の実態が明らかになるばかりでなく、弥生時代の研究にも寄与するところが少なくない。

ドングリ類はごく近年まで救済食料として重要な役割を果たしていたことから明らかに、低生産力段階の弥生時代の初期稲作の発展を、背後から大きく支えていたことが十分に考えられる。初期稲作の第1次波及地帯の東限に位置する濃尾平野における縄文時代から弥生時代への移行過程は、土器論ばかりに固執せず、生業活動それ自体に即してさらに研究を深める必要があるのと考えられる。

また本遺跡の調査自体の問題としても、新たな課題が提起されることになった。従来断片的に出土していた縄文時代資料はやはり集落址の存在を示唆していたのであり、貯蔵穴が確認された以上、住居址などの検出が重要な調査目標の一つとして登場してきたといえるであろう。

引用文献目録

- 渡辺 誠、1987：縄文時代の植物質食料・ドングリ類。考古学ジャーナル、279. 24～27頁。東京。
——、1988：貯蔵穴出土の大型植物遺体。ト、メキ遺跡、22～25頁。東海。

謝 辞

最後に、調査の機会を与えられ種々ご教示下さった愛知県埋蔵文化財センターの石黒立人氏、資料整理にご協力頂いた名古屋大学文学研究科前期課程学生の久保和士氏、同文学部学生の鈴木 元・梶 昌樹氏に対し、衷心より謝意を表する次第である。